

Activity Design / 人の活動を空間デザインに置換するための研究

-キャンパスアクティビティの可視化からみる利用者行動特性の基礎的研究-

東海大学建築都市学部建築学科 岩崎克也



1. 研究概要と目的

本研究は、特徴の異なる2つの大学キャンパスを対象に、行動軌跡・行動・滞留時間・空間の特性といった観点から調査をし、その中から空間のよる共通項や差異をあぶりだし、その特性を明らかにするものである。また、これら特性を可視化することで、今後のエビデンスの獲得と設計実務と連動した実践的なActivity Design 研究に発展・展開することを目的とする。

2. 研究の対象

本研究では、以下の2つの異なる特徴を持つキャンパスの空間とコモンスペース（以下CS）での活動を対象に調査・研究を行った。

2-1 東海大学湘南キャンパス 屋外空間・各所の半屋外空間、19号館1・2階C.S

2-2) 明治大学和泉キャンパスラーニングスクエア棟 各所半屋外空間、室内1・2・3階C.S

3. 分析（報告書の構成）

本報告書は以下の3編（別添）から構成されており、分析内容は小結として各編の結論に記述した。

キャンパスアクティビティの可視化からみる利用者行動特性の基礎的研究 01-03

-01 東海大学湘南キャンパス屋外空間の行動軌跡を対象とした考察-

-02 内部空間の建築動線と行動軌跡・滞留時間の関係に関する考察-

-03 半屋外空間における行動・滞留時間・空間の特性に関する考察-

4. 結論

3章のそれぞれの研究から得た考察を重ね合わせ、以下の6つの結論を導き出した。

- 1 キャンパスの外部空間では、目的地までの最短ルートだけでなく、曲がる回数、人通り、幅の広さなどの心理的な嗜好。に起因した経路を選択する傾向にある。
- 2 内部CSでは、利用者は最短ルート（ショートカット）選択して行動をする傾向が強い。
- 3 内部CSでは、利用者の主要動線上は滞在時間が短く、主要動線の近傍の場所で抛り所となるエッジのある場所は利用者が多く滞在時間も長い。
- 4 内部CSでは、他の利用者との視線が合わず、かつ廻りの見渡せる場所の滞在時間が長い。
- 5 半屋外の外部CSの内、大空間では利用者主要動線上は滞在時間・利用者ともに多く、小さく分節した空間では主要動線上を避けた空間の方が滞在時間は長い。
- 6 半屋外の外部CSでは空間限定度60の空間が最も滞在時間、利用者数がともに多い。

5 今後の展望

本研究で得た知見と可視化することで得たエビデンスを、都市空間とCSの関連性に焦点を当てた今後の実践的な研究への発展と、Activity Designを主軸とした設計活動に繋げて行きたい。

なお、キャンパスアクティビティの可視化からみる利用者行動特性の基礎的研究 01-02は、2024年度日本建築学会大会 学術講演会研究発表を行う予定である。

以上